

頭蓋骨のなかのシニフィアン

——トンプソン「両耳聴現象について」をめぐる（1）

福田貴成

1. 電話、位相、両耳聴

1877年から1879年にかけて、英国の電気工学者・物理学者シルヴァナス・P・トンプソン (Sylvanus Phillips Thompson, 1851-1916) は、「両耳聴現象について」と題する一連の論考を発表している¹。標題からもわかるとおり、これらの論考においてトンプソンは、両耳聴すなわち「二つの耳で聞くこと」を集中的な考察の対象とし、さまざまな実験を繰り返しながら、単耳聴すなわち片耳による聴取においてはあらわれることのない両耳聴特有の現象について、詳細な報告を行っている。

別のところでも論じたとおり²、トンプソンの研究に先立つ1876年、英国の物理学者レイリー卿 (Lord Rayleigh, John William Strutt, 1842-1919) は、論文「音源の方向知覚について」を『ネイチャー』誌上に発表している³。世界的にみて、このレイリーの研究こそが、両耳聴に関する自然科学的探求の嚆矢であると言ってよいだろう。物理的世界に存在する「音源の方向」を、人間はいかにして知覚しているのか。それがこの論文の問いの眼目であり、実験と数理的計算の双方を通じて、それを「二つの耳で聞く」という人間の生理学的所与と一定の合理性をもって結び

¹ Thompson, Sylvanus P., “On binaural audition” in *The London, Edinburgh and Dublin philosophical magazine and journal of science*. Ser. 5, vol. 4, 1877, page. 274-276., “Phenomena of binaural audition” in *The London, Edinburgh and Dublin philosophical magazine and journal of science*. Ser. 5, vol. 6, 1878, page. 383-391. “Phenomenon of binaural audition,” in *The London, Edinburgh and Dublin philosophical magazine and journal of science*, Ser. 5, vol. XII, 1881, pp. 351-355.

² 拙論「聴覚空間の発見——一八八〇年前後の「両耳聴」概念とその認識論的背景について」『表象03』、月曜社、2009年、208-224頁。

³ Rayleigh, Lord, “Our perception of the direction of a source of sound” in *Nature*, 7, 1876, pp. 32-33.

つける——とりわけ、左右それぞれの耳が受ける音の「強度差」を音源の方向知覚と関連させる——に至ったのがこの研究である。

これに対し、シルヴァナス・トンプソンの一連の研究は、同じく両耳聴に深く関わりながらも、レイリーの場合とは異なり、「方向知覚」のような所与の能力——そのメカニズムはさておき、人間に備わっていることが経験的に知られてきた能力——の存在を問いの前提にはしていない。彼の研究は、あくまで両耳聴によって生じる身体的現象それ自体の側へと向けられたものであり、その点においてレイリーとは議論の出発点を異にしていると言ってよいだろう。

では、「両耳聴によって生じる身体的現象それ自体」とは、一体どのようなものであったのか。トンプソンは、音叉をはじめとする多様な発音体、そして聴取のための媒介器具を用いながら、左右の耳のそれぞれに相異なる物理的刺激を人工的に供給し、その際に生ずるさまざまな「聞こえ」の様相を詳細に報告している。それらのうち、本稿でとりわけ注目したいのは、1878年の論考において紹介されている「電話 telephone」を発音体として用いた実験である⁴。アレクサンダー・グレアム・ベル（Alexander Graham Bell, 1847-1922）によって、のちに20世紀を支配する音声コミュニケーション・ツールとなるこのテクノロジーが「発明」されたのはそのわずか二年前のことであったが、トンプソンはここで、この機械の持つ特性を内在的に利用しながら、両耳聴現象に関する質的探究を行っているのである。

電話の受話器の発する音波の「位相」は、回路の接続を変えることによって、容易に物理的反転を施すことが可能である——このことに着目したトンプソンが行ったのは、左右両耳のそれぞれにあてた受話器を通じて、正相・逆相で独立して音波を供給し、その場合に聞こえがどのようなかたちで生ずるかを確かめる、という実験であった。ここで彼がとりわけ位相の問題にこだわっているのには、往時における「位相の知覚可能性」についての共通認識が関わっていたと考えられる。この時期、音響学・知覚生理学分野では、ドイツの物理学者・生理学者ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ（Hermann von Helmholtz, 1821-1894）の『音感覚論：音楽理論のための生理学的基礎』（1863年、のち1875年に英訳刊行）が強力なリファレンスとして機能していた。心理学者であり最初の心理学史家でもあるエドウィン・G・ボーリングの記述によれば、ヘルムホルツの考察のうち、いわゆる「オーム＝ヘルムホルツの音響法則」、すなわち「複合音の音色はそれを構成する複数の部分音の相対的な強度に従い、各部分音の位相は関与しない」という法則も、その頃つよい規範

⁴ Thompson (1878) pp. 383-391.

性を発揮しており、それが「生体は位相を知覚することが出来ない」（傍点引用者）という理解を——ヘルムホルツ自身が述べた内容から離れて——生じさせ、さらにそれが「聴空間知覚における位相差の非関与」という考えへと結びついたという⁵。つまり、「位相の知覚不可能性」という同時代の科学的常識に対し、電話という当時最新の音響テクノロジーを携え、二つの耳を持った身体を舞台にしながら再検討を施したのが、まさにこのトンプソンによる実験・考察であったと言えることができるだろう。

トンプソンはまず、対照実験のため、双方の耳に同じ位相のままで音波を供給する。その時の聞こえのあり方について、彼は「(左右) 二つの振動板が同位相で振動する場合、音は通常と同じように耳の中で聞こえる⁶」と報告している。「耳の中で」という表現自体にも一定の留保が必要と思われるが、ここでは、それが「通常と同じように」聞こえた、という点を押さえておけば十分だろう。同じ位相のままで音を両耳へと供給する時、そこには何の違和感も見出されず、日常の聴取経験の延長上において、その音響現象は感得されることになる。これに対して、左右それぞれの受話器からもたらされる音の位相を逆にして聴取主体へと与えるならば、聞こえはどのように生じるか。トンプソンは、「片方の受話器の振動板の動きを反転し、両者を逆相で振動させると、音のみかけ上の位置は耳の内側から移動し、あたかも後頭部から、或いは、言うなれば小脳の頂部からやってくるかのように聞こえる（強調引用者）」ことを確認した、と述べている。さらに彼は、二つの受話器を逆相にしたまま、送話器側のスタンドを助手に叩かせた。すると、「誰かが頭蓋骨の後部を内側からハンマーで叩いたとしか言いようのない感覚を経験した（強調原文）」のだと、彼は報告しているのである⁷。

2. 身体「内部」の「外部」化

「小脳の頂部」にせよ「頭蓋骨の内側」にせよ、当然ながらこれらの空間的位置は脳という物質によって満たされており、そこには物理的音源など存在のしようが

⁵ Boring, Edwin G., *Sensation and perception in the history of experimental psychology*, New York : Appleton-Century, 1942, p. 382.

⁶ Thompson (1878) p. 385.

⁷ Thompson (1878), p. 385, 386. なおこの前年のグレアム・ベルにも同様の報告があり、そちらも併せて初期両耳聴研究のありようを考察することが必要であるが、それは今後の研究に委ねたい。Alexander Graham Bell, “The Telephone” in *Journal of the society of Arts*, vol. xxvi, No. 1306, Nov. 30, 1877, p. 22.

ない。そこに音が生じるということは物理的にあり得ず、また二つの受話器を耳にあてた聴取主体も、あらかじめその不可能性を認識しているはずである。しかし、その不可能性によって占められているはずの空間に、「聞こえ」がまぎれもなく現象してしまう。今日であればこれは、たとえば左右二つのオーディオ・スピーカーへの接続を一方のみ+と-を逆にすることによって簡単に経験することのできる現象であるし、その点では特段の驚きもない報告のように思われるかもしれない。しかし先にも述べたとおり、トンプソンによるこの報告は、電話という音響再生テクノロジーの発明からわずか二年後になされたものであり、したがって、その電氣的な稼働原理を利用した結果としてトンプソンが見出した「音源のありえない場所に音が生ずる」現象は、当時において、それなりに大きな驚異をもって感得されたものであろうことは想像に難くない。

より強い言い方をするならば、ここにはもはや、旧来的な意味での「音源」は存在していない。どういうことか。もちろんここにも、両耳へとあてられた受話器、そしてその内部において媒質の振動を発生させるために設えられた振動板という音源は、まぎれもなく物理的に実在している。しかしそれは、レイリー卿が「音源の方向知覚について」で論じた場合のような、「外的」世界において特定の位置を占め、その空間的位置が聴取主体にとっての知覚の対象となりうる、という意味における音源ではありえない。それは、二つの耳という感覚器官に物理的刺激を供給しつづける振動源という、きわめて即物的な地位しか、ここでは与えられていないのである。それに対応するように、耳という器官にも、その刺激を受容し感覚を惹起させる生体の機構、という以上の意味は与えられていない。つまり、このトンプソン実験のありようが示しているのは、刺激とそれを受容する感覚器官との、いわば剥き出しの関係である。それは、物理的実在としての音源の方向を把握するという日常性から逸脱し、「外的」世界なるものの安定した像を揺るがす「刺激と感覚との根本的に恣意的な関係」（ジョナサン・クレリー）⁸の、あからさまな聴覚的現象化、と言うことができるだろう。

それでは、トンプソンが二つの受話器を通じて「頭蓋骨の内側」に聞いた音は、レイリー卿の実験において二つの耳が「外的」世界に知覚した音源の方向と、まったくの別物なのか。そうではない。両者はいずれも、差異をとまなう刺激の供給か

⁸ Crary, Jonathan, *Techniques of the Observer; on Vision and Modernity in the Nineteenth Century*, Cambridge/London: MIT Press, 1990, pp. 90（クレリー、ジョナサン『観察者の系譜——視覚空間の変容とモダニティ』遠藤知巳訳、十月社、1997年、邦訳137頁）。

ら、或る明瞭な「同一性」が立ち現れるという点において、連続した事柄であると捉えるべきである。つまりトンプソンが見出したのは、すでにレイリー卿が「音源の方向知覚」の研究を通して気づいていた、聴覚における「感覚的〈差異〉からの知覚的〈同一性〉の出来」という事態の、より先鋭化した姿と言うべきものである。そして、そこに生じているのは、身体「内部」の「外部」化とでも言うべき、一見奇妙な、しかし事の帰結として必然的に至らざるを得ない事態なのである。

これはどういうことか。レイリー卿が見出したのは、「外部」空間の一点から発せられた音波が左右両耳の感覚に与える物理的性質の「差異」によって、われわれは、その発生源の所在を「外部」空間のなかに知覚的に位置づけることができる、という事実であった。これに対しトンプソンの実験は、同じく「差異」の受容を聴取主体に強いながら、そのようなわかりやすい「外部」性を無きものとしてしまう。とはいえそれは、「外部」との境界の単純な曖昧化を意味するのではない。聴取する主体が、刺激の受容から「頭蓋骨の内側」に「聞こえ」を生成させる時、この「内側」は身体「外部」と地続きをなす、三次元空間内の任意の一点という意味を与えられることになる。聴取する身体は、そこで「聞こえ」を生み出す知覚機械としてのみ存在するのであり、その生身の「物理的」な輪郭は、知覚する主体にとって、便宜的な意味しか持たされていないのだ。その結果として、身体「内部」なるものは、ここでその積極的な意味を失ってしまう。それは、聴取主体を座標の原点として構成される三次元空間の任意の一部分、という以上のものではなくなってしまうのである。身体「内部」の「外部」化とは、知覚主体にとっての空間のあらわれにみられる、このようなあからさまな均質化の事態を指して言うものである。知覚的に立ち現れる聴覚空間において、「他ならぬ私の身体の内側」という特権性は剥奪され、それはみずからの輪郭線の外部にひろがる世界とひとしなみに扱われる。そこには、音と身体との密着的な接触の経験がわれわれに想像させるような、距離感の喪われた世界における触覚的官能性など、いっさい存在しない。そこに広がり始めるのは、みずからの身体内部さえも視覚的な明晰性のもとに距離化してしまうような、無慈悲なまでに均質な「聞こえ」の空間なのである。

3. 「聴覚〈映像〉」の経験

ところでトンプソンは、この論考において、逆相の音響刺激を左右両耳へと供給することによって「小脳の頂部」に現象した音響の「見かけ上の定位 *apparent locality of the sound*」に対して、「聴覚〈映像〉 *acoustic image*」という言葉表現

を与えている⁹。当然ながら、「小脳の頂部」であれ「頭蓋骨の内側」であれ、そこは「映像」の展開される舞台ではありえない。それは、あくまで脳という物質に満たされた身体の一部に過ぎない。にもかかわらず彼は、本来視覚的でしかありえない「映像 image」なる語に、「聴覚の acoustic」という形容詞を結びつけ、かつ *image* とイタリック体による強調を施すことによって、その音響の出来の様相を視覚的語彙をもって言語化している。相矛盾する二語のなかば強引な接続によって、トンプソンは、視覚的に存在していないことは知的に理解可能であるにも拘らず、「映像」と言うほかないかたちで現象してしまった音響の生成様態を表現しているのである。

音が、音のみによって、或る視覚性をともなって現象する——これは、トンプソンによる一連の実験報告から数年ののち、1881年にパリで開催された国際電気博覧会において、やはり電話という最新のテクノロジーを用いた展示を通じて、複数の観客たちによって感得された現象と相通じている。フランスの技師クレマン・アデル (Clément Ader, 1841-1926)の手になるこの展示は、博覧会場となった産業宮と、そこから2kmほど離れたオペラ座とを電話回線で結び、オペラ上演中の音響を博覧会場へとリアルタイムで伝える劇場中継システムであった。二個一組の電話回線によって構成されたこのシステムは、オペラ座に設置された二つのマイクロフォンからの音響を、電話回線を通じて、産業宮に集う観客たちの左右ふたつの耳へと伝達する。博覧会に先立つ予備試験の段階で、例えば『ラ・ナチュール』誌上において編集主幹ガストン・ティサンディエ (Gaston Tissandier, 1843-1899) が「これは驚異だ、マジックだ」という言葉を口に¹⁰、また同誌上で「真に驚嘆すべき得られた諸結果は、疑いなく、電気博覧会の成功へと大いに貢献することだろう」とも言われていたこのアトラクションは、実際に大きな盛況を博し、「オペラハウスの中継が実施される夜ごと、その場に居合わせたいと望む人々が列をなし、それは博覧会の会期終了まで続くこととなった¹¹」という。

その「マジック」「驚嘆」の一端は、単に中継がおこなわれたという点にではなく、前述のようにこの中継が二つの回線を通じて行われたこと——今日的な言葉で言えば「二チャンネルステレオ中継」がなされたこと——に起因していたようである。

⁹ Thompson (1878).

¹⁰ Tissandier, Gaston, «L'Exposition d'Électricité», *La nature*, n° 430, 1881, p. 202.

¹¹ Askew, Antony, “The Amazing Clément Ader” in *Studio Sound*, October, 1981, p. 67.

例えば、『ルヴュ・ポリティーク・エ・リテレール』誌に掲載されたレポートにおいては、「(引用者註：受話器を両耳にあてた来場客は) 舞台の上で歌う人々の場所をはっきりと言い当てることが出来た¹²⁾」と、その体験のありようが記述され、また『サイエンティフィック・アメリカン』誌においては「実験が始まるや否や、歌手たちは或る者は右に、また或る者は左にと、固定された距離をもって、聴取者の心のなかに姿をあらわす。歌手たちの動きを耳で追うことはたやすい。また、歌手たちが各人の位置を変えるごとに、聴覚的に彼らが現れることになる場所までの想像上の距離を、容易に指し示することができる¹³⁾」と報じられている。言ってみれば、遠く離れたオペラ座にまで、電氣的に遠隔化された二つの耳による「音源の方向知覚」(レイリー卿)から、このアトラクションに特有の「驚嘆」がもたらされていたことを窺うことができるのである。

ここで注目したいのは、このオペラ中継の聴覚的経験を描出する際に、当時の報道において頻繁に「パースペクティヴ」なる語が用いられていたという点である。前出の仏米の報道いずれにおいても「音のパースペクティヴ (perspective sonore)¹⁴⁾」「聴覚のパースペクティヴ (auditive perspective)¹⁵⁾」といったように、経験のありようを記述するための言葉として、何度もこの語が選択されている。「パースペクティヴ」という語の使用自体に「視覚性」の含意が——より正確に言えば、聴覚のみへの刺激から出来たはずの知覚現象に対する視覚的用語の流用が——見て取れることは明白だろう。物理的刺激の水準における視覚の排除が、知覚的、或いは経験的水準において「視覚的なもの」を感得せしめてしまっている、という奇妙に振れた事態を、この語は暗示しているように思われる。先にも引いたデュ・モンセルによる「実際にオペラ座で聞いたときよりもよく聞こえた¹⁶⁾」という報告や、「この音のパースペクティヴは、オペラ座におけるよりもさらに際立ったものである¹⁷⁾」

¹²⁾ Pillaut, Leon, «Exposition d'Électricité. Les audition téléphoniques de l'Opéra. Cinq minutes du *Prophète*» *La revue politique et littéraire*, Troisième Série, Tome II, 1881, p. 602.

¹³⁾ “THE TELEPHONE AT THE PARIS OPERA,” *Scientific American*, December 31, 1881, pp. 422-423.

¹⁴⁾ Pillaut, *op. cit.*, p. 602.

¹⁵⁾ “THE TELEPHONE AT THE PARIS OPERA,” *Scientific American*, December 31, 1881, pp. 422-423.

¹⁶⁾ Du Moncel, Théodose, «Auditions Théâtrales Téléphoniques» *La lumière électrique*, 21, Septembre, 1881, p. 376.

¹⁷⁾ Pillaut, *op. cit.*, p. 602.

という言を参照するならば、事態の捩れはより明白であろう。つまり、これら当時の報道にみられる証言においては、「視覚的対象の不在」を前提とした聴取体験が、視覚的現前がともなう場合以上に「視覚的」な経験として受容されていた可能性までもが示唆されているのである。

ここでふたたび、トンプソンによる電話を用いた諸実験を想起しよう。1881年のパリの博覧会場において、不特定多数の来場客たちの聴覚へもたらされた「音のパースペクティヴ」もまた、見えざる空間のうちに音響それ自体として「視覚化」され、まざまざと出現したという点において、トンプソンが用いたあの「聴覚〈映像〉」という矛盾した表現によって名指すに相応しい存在である、と考えられはしまいか。日常的な聴取経験において必然的に生ずる物理的発音体との安定した指示関係から溢れだし、響きそれ自体がみずからを対象として指し示しながら、何もない空間のあちらこちらに現象する——電話という固有の技術と身体との接続によって招来された音のイリュージョンが、指示関係からの逸脱のうちに見出すこととなったもの、それこそが「聴覚〈映像〉」という不可能な存在であったのである。

4. 頭蓋骨のなかのシニフィアン

トンプソンが実験室内で「発見」し、またアデルのシステムが実験室的状況を離れて不特定多数の人々のうちに現象させた「聴覚〈映像〉 *acoustic image*」。この矛盾を孕んだ語が、のちにスイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールが「記号」の生成の謎に迫る過程で用いた「聴覚映像 *image acoustique (auditive)*」なる語と、少なくとも表記の水準において共通のものであることに、ここで着目してみたい。両者は、近接しつつも異なる時期に、まったく異なる場面、異なる分野において用いられたものであり、その表層的な一致自体を因果関係や影響関係において捉えることには、ほとんど意味はないだろう。しかし、まったく異なるコンテクストにおいてほぼ同じ表現が——しかも日常的な言語の運用からすれば奇異と言うべき相矛盾する二語を結合させた表現が——はからずも採用されてしまったということのうちに、そこに生じた現象同士をつなぐ何らかの共通性の存在を推測することが可能ではなかろうか。実際、ソシュールの「聴覚映像」をめぐる思考は、電話という固有の技術との接続によって見出された「聴覚〈映像〉」の特質をより正確に把握するためのひとつの補助線として、重要なアナロジーを提供しているように思われる。

周知のようにソシュールは、「シーニュ *signe*」すなわち「記号」を、単なる外的現実には貼られたラベルとして捉える考え方を斥け、そのもののうちに「シニフィア

ン signifiant」すなわち「意味するもの=記号表現」と「シニフィエ signifié」すなわち「意味されるもの=記号内容」という不可分の二側面を孕んだ存在として位置づけ直した¹⁸。シーニュを構成するこの両側面は、ともに共時的な分節を通じて「心的」に生成した存在であり、それが外的現実すなわち「レフェラン référent」を指示することによって、記号作用が発生する。

松浦寿輝は、この「観念と音という二つのマグマが同時に分節される瞬間」に生成した一方の側面たる「シニフィアン」が「物理的にのみ響く物質音」ではなく、それがあくまで「主体に内在する心理的な産物」であるというソシュールの所説に注意を促し、それが意味するところについて詳細な読解を行っている。シニフィアンが「物質音」ではなく「心理的な産物」であるとはいかなることか。そこで彼がとりわけ密着的な思考の対象として俎上に上げるのが、ソシュールが「シニフィアン」という語に至りつく以前、「概念 concept」——のちの「シニフィエ」——との不可分の対として用いていた「聴覚映像」という語である。「聴覚映像は物質音ではない」——ソシュールの死後に編まれた『一般言語学講義』所収のコンスタンタンによる第三回講義ノートは、こう断言されたのち次のように続けられている。「これは音の心的な刻印である。[かりにこの部分を] 物質的ということがあっても、これは〈感覚的〉sensorielle、つまり諸感覚によって供されるという意味であって、〈物理的〉physique という意味ではない¹⁹」。このくだりを引用しつつ、松浦は「音の心的な刻印」と定義されているこの「聴覚映像」なるものがどのようなものなのか具体的に把握してみようとするとき、微かな困惑を覚えずにはいられない²⁰と記す。この「微かな困惑」は、一体何に由来しているのか。勿論ひとつには、「聴覚映像」が「聴覚」に供されるものでありながら——ソシュールはのちのシニフィアンと呼ばれるものに「音 son」という語を当てていたこともある——物理音ではなく「心的」存在である、というそもその前提に含まれるわかりにくさが、その「困惑」の原因であったはずだ。しかしそれ以上に、この「心的な刻印」に対して「聴覚映像」という名が選択されていることの必然性の所在が明瞭でないことが、この「困惑」のより直接的な原因となっている。松浦は述べる。「映像」という実詞を「聴覚的

¹⁸ 以下、ソシュールの「聴覚映像」に関する記述は、丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981年、および松浦寿輝『口唇論 記号と官能のトポス 新装版』思潮社、1997年を参照元とする。

¹⁹ 丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981年、133頁、および松浦寿輝『口唇論 記号と官能のトポス 新装版』思潮社、1997年、137頁。

²⁰ 松浦、前掲書、137頁。

な」という形容詞が修飾するというのは、事改めて考えてみればかなり奇妙なことではないだろうか。もしそこに形容矛盾がないとすれば、「聴覚」と「映像」とはここでいったいいかなる絆でどのように結びついているのであろうか²¹。本来、視覚という固有の感覚の対象であるはずの「映像 image」が「聴覚的」と形容されることの奇妙さ、居心地の悪さの前で立ち止まり、それに詳細な語義的・理論的検討を加えながら、彼は次のように結論づける。「それをなぜ聴覚的な映像と呼ぶのか。イマージュという言葉は、ここでは、視覚的な光景という側面よりもむしろ、或るものそれ自体ではないその反映、似姿、そのものを表象＝代行＝再現する相似の写像という側面に重点をおいて用いられているように思う。「音の心的な刻印」とは、音が意味する＝心的に喚起する映像ということではない。物質音そのものならざる、その心的な表象ということなのである（傍点原文）²²。物質音そのものは、あくまで「諸感覚によって供される」刺激、あるいは意味論的にニュートラルなデータと言うべきものであり、それ自体は記号 *signe* を構成する要素ではない。感覚に与えられた物質音という刺激から、受容主体の心的過程においてたちあらわれる音の「相似の写像」すなわち「表象 representation」こそが、記号の一面を構成するシニフィアン＝聴覚映像である。したがってここでの「映像 image」という語は、この「表象」性、音響という物理的実在に対する「反映」性を表現するために導入されているのであり、その日常的な使用から想像されるような「視覚」的含意をとりたてて持たされているわけではないのだ。

このように解釈される限りにおいて、ソシュールの「聴覚映像」をめぐる思考は、たとえば 19 世紀後半におけるヘルムホルツの「無意識的推論」説に代表される思考、すなわち「感覚」と「知覚」とを峻別して両者を意識されざる推論過程によって結びつける思考のありかたと、形式的にはきわめて似通ったものであるように思われる²³。刺激によって惹起された剥き出しの「感覚」から、外部の「知覚」が、意識されざる「推論」を通じて浮かび上がって来ると相似たかたちで、音声という物理的刺激を与えられた剥き出しの「聴覚」から、その「反映、似姿」或いは「相

²¹ 同書、138 頁。

²² 同書、139-140 頁。

²³ ここではヘルムホルツの思考について深入りしないが、ここに触れた「無意識的推論」説と 19 世紀後半における両耳聴をめぐる思考との密接な関係については、前掲の拙稿を参照のこと。また「無意識的推論」説を含むヘルムホルツの思想への有用なガイドとして、大村敏輔『認知心理学の源流 ヘルムホルツの思想』ブレーン出版、1996 年を挙げておく。

似の写像」としての「映像 image」が、心的な記号作用のプロセスを通じて立ち上がってくる——少なくともそうした形式面において、シニフィアンの生起をめぐるソシュールの思考は、より一般的な「知覚的」営為に関する19世紀以来の科学的思考を——おそらくは意図せぬままに——引き継いでいるものとして理解することが可能である。そしてその点において、「聴覚映像」なる語はまったく理解を拒絶するものでは無く、一定の知的了解可能性を担保した存在であるようにも思われる。

しかし、たとえ「映像 image」なる語を視覚という固有の感覚から引き離して理解し、さらにはそれを感覚と知覚との峻別をめぐる科学的思考とのアナロジーによって捉え直したとしても、「聴覚映像」なる語がわれわれにもたらす奇妙な感覚のすべてが払拭されるわけではない。実体ではない「反映、似姿」或いは「相似の写像」とは、一体どのようなものなのか。もういちど松浦の言を引こう。聴覚映像は「鼓膜に響く音ではない。その、イメージだからだ。が、と言って視線でまさぐったり脳裡に浮かびあがらせたりすることのできる映像でもない。人が話したり聴いたりする音声のシニフィアンが問題となっているからだ²⁴」。彼はこうして否定辞を重ねながらこの語の輪郭を浮かび上がらせるべく努めるのだが、最終的には、次のような結論に達することになる。「完全に聴覚的でも完全に視覚的でもなく、その中間に曖昧に漂い出しながら音でもあり同時にイメージでもある両価性として存在しているこの音のイメージなるものを、具体的に想像してみることは困難である²⁵」。確かにそれは、「知的」に理解出来たかのような印象をわれわれに与えうるかもしれないが、いざ「具体的に想像」したり、また「分析したり記述したり」しようとする、感覚の裂け目からすると逃れ去ってしまう。「聴覚映像」とは、判然たる理解、腑に落ちる解釈を拒む「鵠のごとき畸形概念²⁶」なのである。

ここで再び、トンプソンが頭蓋のなかに見出し、またアデルが博覧会の来場客たちに提供した「聴覚〈映像〉」を想起しよう。物理音という刺激が二つの耳という「感覚」器官へと供給されると、そこからひとつの「聞こえ」が、「知覚」的に生成する。この点において、それはソシュールの「聴覚映像」と、単に表記の水準に止まることのない、構造的な類似性を持つ存在だと考えられる。しかし、そこに「知覚」される「聞こえ」としての「聴覚〈映像〉」には、シニフィアンとしての聴覚映像の場合について松浦が言うような「想像の困難」はいっさい伴っておらず、その点にお

²⁴ 松浦、前掲書、142-143頁。

²⁵ 同書、143頁。

²⁶ 同書、143頁。

いて両者は大きく異なる。トンプソン、或いはアデルの「聴覚〈映像〉」は、場合によっては歌手や演奏者といった「指示対象」を聞き手のうちに具体的に想起させつつも、同時にその指示対象性を無効とするかのように、「聞こえ」それ自体としての実在感を湛えて、何もない空間のうちに、明瞭に現象する。確かにそれは視覚的には存在しない。しかし、主体からあたかも計測可能であるかのような距離をおいて、外部空間の其処彼処に、或いは頭蓋骨のなかの昏がりへと聴覚的に現象することで、それは「音のパースペクティヴ」をはっきりと感得させる。あくまで「聴覚」のみに由来する知覚であるにもかかわらず、否応なく惹き起こされてしまうこの「視覚」的経験に対して、「聴覚〈映像〉」という矛盾する表現が用いられるのは確かに相応しいと言うべきであろう。

ソシュールの仕事とは関わりなく、異なる時期と文脈において見出されたこの「聴覚〈映像〉」とは、アナロジーを用いることが許されるならば、経験的に感得された「シニフィアン」、不可能性のイマージュの現実態であったと言うことができるだろう。歌われるオペラの詞章や奏でられる旋律線の「シニフィエ」とともに心的な「シーニュ」を形成して「指示対象」としての具体的演奏を想起させつつも、音響それ自体において明晰な「映像」として心的に立ちあがるもの。それこそが1880年を前後する時期に受話器を両耳へとあてがった身体によって発見された「聴覚〈映像〉」の記号論的身分であった。疑似的なシニフィアンの、可感的なあらわれとしての「聴覚〈映像〉」体験。電話や蓄音機など、聴覚を対象とする「ニューメディア」が続々と産声をあげはじめたこの時期に、科学的探究とエンターテインメントの双方において、テクノロジカルな達成を背景にしつつ聴き出されることになったのは、そのようなあらたな、そして感覚的な振れを湛えた現象であった。そして、この過剰な聴覚経験が、今日のステレオ・システムやイヤフォンによる音楽／音響聴取の快楽にまで、二つの世紀を跨ぎながら、いまでも残響しつづけていることは言うまでもあるまい。

謝辞：本研究はJSPS 科研費 JP15K02201 の助成を受けたものです。